

ドイツの都市で目にした社会福祉と戦争の影 社会福祉アーカイブズの必要性

西田 恵子
立教大学

ドイツのある町の公文書館で保存されている社会福祉施設の文書を閲覧していたとき、思わず息をのんで動揺したことがある。

私は地域福祉が専門領域で、地域における民間福祉団体の運営の困難と課題について関心が高い。そのことに関して近年は、第二次世界大戦後に要援護者と福祉施設に対して救援活動を展開したアメリカのLARAという海外救援組織とその活動を研究している。焦点は日本なのだが、研究の展開には国際比較が有効だと考え、日本と同様に支援を受けていたドイツと韓国を並行して調べることにした。幸いなことに研究チームをつくるにあたっては社会福祉学を中心としながら政治学、法学、アーカイブズ学の研究者に参加していただくことができた。研究を企画した者としては望んだ研究体制を敷くことができたといえる。

さて、ドイツである。ドイツ固有の州制を考えれば体系的な調査は容易なものではない。当初から日本の横浜港に準じた港を抱えるブレーメンを主要な調査地域に位置づけてはいたが、なかなか成果があがらないことや調査を一つの都市のみで終わらせる危険性をとらえ、調査対象の範囲を広げて複数の都市で調査を進めることにした。新型コロナウイルスが感染拡大する前のミュンヘン、ハンブルクの公文書館、ウイルスが感染縮小の気配に転じた2023年3月のハノーファー、ツェレ、オスナブリュックの公文書館、そして研究休暇中の2024年2月のベルリンの公文書館などである。一連の調査で常に不思議だったのは、日本では当時の国語の教科書に載るなどして広く知られたLARAの救援活動が、物量も期間も圧倒的に上回っていたドイツでありながら、それを知っている人物は皆無に等しかったことである。現在のドイツ現代史の指導者的存在である教授もソーシャルワークの教授も福祉施設関係者も、そして数は少ないが高齢者施設の利用者も皆、知らないと言う。実は戦後混乱期や大規模災害時に救援活動を行う組織は複数ある。たとえば私たちの研究対象は厚生省（当時）が管轄していたものだが、その他に通産省が管轄していたCAREなど諸々があった。ドイツで知られているのはCAREで、これは誰もが知っており、高齢者施設の利用者は「子どもの頃に学校で習った」と口々に発言するほどであった。このことについてはここでは踏み込まないが、社会福祉の研究者にとっては興味深いミステリーである。

しかし、一人だけ私たちの研究に関心を持った人物がいた。名和田是彦教授（法政大学）の調査と人脈により2017年にお目にかかることができたカール＝ルードウィヒ・ゾンマー氏である。氏との対面は一度きりで、歴史学者であった氏は東西分断という背景を基盤として政治に主眼をおいた研

究を進めておられ、私たちの関心にある要援護者支援や社会福祉施設の運営という観点からの資料収集はしておられず、残念ながら意見交換で知見を深めるまでには至れなかった。氏の関心はすでに別のものに移っていたことにもよる。氏が収集した資料の多くは知己の牧師や救援組織を研究していた人物から提供を受けたものとのことで、私たちの調査でさらに掘り起こすべき資料の所在は明らかにならなかった。それでもドイツで唯一関心を寄せてくれた氏との出会いは以降の私たちの研究にいくつかの示唆を与えるありがたいものであった。しかしそれとは別に、面談から7年を経た昨冬、私たちはベルリンへ行くせっかくの機会だからと念のため問い合わせたドイツ赤十字アーカイブセンターで想定外に閲覧できるファイルがあることがわかり、大いに喜んだ。「調べたが何も出てこなかった」と氏から聞いていたことが覆ったのである。資料や情報はできるだけ早く入手するのが得策というだけでなく、粘り強く関心を持ち続けたからこそ入手できることもあるという貴重な経験の一つになった。つまり私たちは見つからないことであきらめず、非効率的であっても探し続ける研究の旅に出ることで可能性を手に入れることができるといえる。

書くことに迷いが無いわけではないが、次のことも記しておこう。ある公文書館で幸いにも戦中戦後に運営していた援護施設の文書が複数あり、閲覧することができた。事務的な文書の中には入居者の記録のようなものもあったし、銀行からの再三に渡る出納の証紙もあった。古びた紙片を一枚一枚めくっていくうちに、ドイツ語の苦手な私でもすぐわかる言葉に気がついた。タイプ書きの文書の終わりに、サインをする部分に「Heil Hitler!」とあったのだ。それは1937年の綴りであった。サインされるどの文書にもこの言葉が入っているという事実に私は困惑した。その言葉に直接接して驚いたとともに、その言葉が福祉施設の文書にあったこと、そしてその文書が保存され閲覧できるようになっていたことに驚いた。ヒトラーの影響は福祉施設にまで及んでいたのである。そのことがこの文書が残されていることによって具体的に把握できた。私は社会福祉と戦争は対極にあると考えてきた。だがそれはそれほどシンプルな話ではない。戦争の時代に福祉施設がどのように運営されていたのか、あるいは生き延びる策をとってきたのか、世界で戦争が広がる今日の時勢を思うにつけ、しっかりと把握し直し、検討する必要がある。そのような考察の手がかりになる貴重な資料がアーカイブズの奥底に所蔵されていたのである。日々、紡ぎ出される様々な文書や資料を保存するアーカイブズの重要性、その存在価値をあらためて認識することになった。

ひるがえって日本である。わが国にも各地に公文書館はある。しかしながらその地の社会福祉をたどれる文書や資料を保存しているところは稀有である。それらの意義を認識した稀少な社会福祉法人が保管庫等で蓄積し一部を展示するという状況にとどまるのではないだろうか。私の研究もこの障壁にぶつかっている。戦争被害の大きかった大都市を中心に公文書館や組織規模の大きい社会福祉法人をたずね歩いてきたが、その成果は時間と労力に対して決して大きいとはいえない。問題は戦後混乱期という時代状況と文書等の保存を重視してこなかった習慣、あえていえば文化にある。もちろん中には非常に手応えを得た調査先があったことは強調しておきたい。また、韓国においては日本を上回る困難があった。第二次世界大戦後の政治の混乱状況、韓国戦争が第一の要因にあげられることはいうまでもない。

筆者は社会福祉のあるべき姿を求めていく上で、過去を知ることは重要だと考えている。そのためには「社会福祉のアーカイブズセンター」の整備が必要不可欠だと考える。1980年代後半、筆者が勤務した神奈川県社会福祉協議会には資料室があり、相当の資料や文献が保存されていた。一般の図書館や文書館には保存されていないものが多く、司書が一人、専任職員として採用され、配置されていた。長くこの職に就きベテランとなっていたその司書はまぎれもなく社会福祉のアーキビストの

役割を果たしていた。私をはじめ職員たちは立案のためにこの資料室をしばしば利用した。外部の実践者や研究者も来ていたし、卒業論文を書こうとする大学生、あるいは研究に取り組む大学院生も相談に来ていた。当事者グループのメンバーが自分達の実施した調査の報告書や広報紙を届けにくることは日常的にあった。時には阿部志郎先生（横須賀基督教社会館）がおいでになり、アーキビストとやりとりしながら資料を求めておられる姿も拝見した。その資料室が行財政改革の流れで閉鎖されてからずいぶん時間が過ぎた。残念というほかない歴史の流れである。

願わくは、情報の時代の時代にふさわしい社会福祉の基盤として、都道府県単位で社会福祉のアーカイブズセンターが設置され、ネットワークを結んで成果を育ててほしい。歴史を尋ねる研究者の切なる願いである。



ベルリン州立文書館（2024年2月）筆者撮影



ドイツ赤十字アーカイブズセンター（2024年2月）筆者撮影